『つれなき美女』のロマンス

永　井　豊　実

Mais où sont les neiges d'antan ?
〈さわれ　こぞの雪　今いずこ〉

Ballade des dames du temps jadis
『いにしえの美姫のバラード』
（Villon の遺言詩集より）

(i)

ダンテの神曲・地獄編・第五歌にキーツ（John Keats 1795-1821）がすっかり魅せられてしまったのは，1819年4月16日頃である。4月21日，水曜日に *La Belle Dame Sans Merci*『つれなき美女』を書いている（28日説もある）。おそらくこの頃は頭の中が地獄篇で渦巻いていたであろう。弟ジョージ夫妻に宛てた手紙の中でキーツはこう言っている。「ダンテの第五歌はますます気に入ってしまった。そこはダンテがパオロとフランチェスカに会う段である。このところずっと気が滅入ってしまっているのだが，そんな時こそ，地獄の中にいる夢を見る。その夢はこれまで経験したことがない程喜ばしいものの一つで，そこに描かれているように，渦巻く大気の中を自分も漂って，美しい人に自分の唇を合わせ，それがいつまでも続くように思われる。この暗くて冷たいさ中でも自分は胸が熱くなってしまう。花咲き乱れる梢が聳えたっていても，しばらく雲のように軽々とそこに留まり，やがてまた風に吹かれて飛んでゆく。ここにソネットを書いてみたが，14行ではとても自分が感じたものを書き表せない。ああ，毎晩あの夢を見られたらなー」と言ってこのあと14行詩を書いている〔*The Letters of John Keats* II : ed. H. D. Rollins ; Harvard Univ. Press, 1980. p. 91〕。キーツの想像を追うならば，とてもこの詩は満足できるものではなかったので，キーツは『つれなき美女』に夢を託したのである。

キーツをこれまでになく夢中にさせたダンテの地獄編・第五歌を，寿岳文章氏訳にて地獄の描写を探ってみることにする。ちょうどブレイク（William Blake）の「ミノス」とか，「愛欲者の圏」の挿絵もあるので，その絵を見ながら想像を馳せてみる。

ダンテが地獄の第2圏へヴィルジリオと共に降りてゆくと，入り口で冥官ミノスが罪を犯した亡者共を順次尾でもって裁いている。その尾の二巻き目の示す圏へ入ると，そこは暗く業風が吹きすさぶところである。愛欲にひたった亡者たちが地獄の責め苦に会って，泣き，喚き，呪い，

悲嘆の声をあげて風にもてあそばれている。アッシリアの美貌の皇后セミラミス，トロイからカルタゴへ逃れて来たアイネイアスと相愛になったディドー，カエサルやアントニーを手玉にとったエジプトの女王クレオパトラ，パリスに誘拐され，トロイ戦争のもととなったスパルタのメネラウスの王妃ヘレネ，ケルト伝説に出てくるトリスタンとイゾルデ王妃，等々が見えている。その群れの中から離れてやってくる二つの魂，フランチェスカ・ダ・リミニとパオロ・マラテステをダンテが見つけて呼びかける。それに応えてフランチェスカは自分の生まれを語る。さらに続けて

「やさしい心を忽ちに焼きつくす恋のほむらは，今はわが身から取り去られた美しい容姿ゆゑに，このひとの心を捕らえた。そのさま，思ひかへすも苦しい。

恋しいひとを，ただひたすら恋ひずにをれぬ恋のほむらは，そのひとをいとほしむ烈しい喜びに私をくるみ，その思ひは，みらるるやうに，今も私を離れぬ。

恋のほむらは，われらふたりを一つの死に導いた。カイーナは待つ，われらふたりのいのち消した者を。」

〔寿岳文章訳：『神曲　地獄篇』，集英社　昭和52年，pp. 60-3〕

と答えたので，ダンテはまた言葉を掛ける。

「フランチェスカよ，あなたの苦患は，悲しさと憐れゆゑに，私の涙を引き出す。

だがまづ語りたまへ。甘美なためいきの折ふし，何により，どんなきつかけで，定かでない胸の思ひを恋とは知れる？」

聞いて，フランチェスカは私に。「みじめな境遇に在つて，しあはせの時を想ひおこすより悲しきは無し。このこと，あなたの師はよく知りたまふ。

しかしあなたが，われらが恋の最初の根づきを是非に知りたいと願はれるなら，私も，泣いて語るひとのひそみに倣ひませう。

ある日，つれづれに，私たちはランチロットが恋のとりことなつた物語を読みました。ほかにひとは居らず，たれはばかることも無く。

読みもてゆくうちに，いくたびかふたりの眼は会ひ，顔は色変へました。しかし私たちをおとしたのは，ただ一つの刹那。

すなはち，こがれてやまぬほほゑみが，思ふひとの口づけを受けたくだりを読んだとき，永久に私と離れないあのひとは

うちふるへ，私の口を吸ひました。その物語の書と，物語の作者は，げにガレオット。その日われらは，もうそれ以上読み進みませなんだ。」

一つの魂がかう語つたとき，相手の魂はいたく泣き，私も哀憐の情にたへかね，死ぬる思ひに，気遠くなり

倒れ伏した，死体がどうとくづれ落ちるがに。

〔ibid., pp. 63-4〕

以上引用した部分は，『神曲』のうちで最も感動深い一節である。パオロとフランチェスカの恋のとりもちはランチルロット物語であった。上田　敏全集，第4巻の劇史『フランチェスカ』〔教育出版センター，昭和56年〕にさらにこの間の悲劇の事情が詳しく書いてあるので二人の事件はそちらに譲るとする。ただこの劇史を書いたガブリエレ・ダヌンチオ（Gabriele d'Annunzio 1863-1938）が腰元たちに歌わせる『燕の歌』は上田　敏がぞっとする位，優美で高尚な歌だと絶賛している。この劇の三幕目の最後のさわりを引用すると，

「終にランスロットがガレオットGaleotto といふ武士の手引にて女王ギネヴァ Guinevere（伊太利亜語にてジネヴラ Ginevra）と始めて密会する事を得，終に接吻するに至る條に至り，感極まって，夢，現となり，パオロはわれ知らず，姫に寄り添うて，くちづけする。……」〔上田敏全集　第4巻 pp. 261-2，旧字は新字体にしてある。〕となっている。

なお，上田　敏もこの地獄界を訳している〔上田　敏全集第10巻 p. 71〕。その訳の中で特に印象に残っている言葉は，フランチェスカの言う「愛されて，また愛せざるものやある。」と「かなしみにありて楽しかりし日を思ふばかり痛ましきはなし。」である。なおこの場面について，『日本における外国文学』（上巻）島田謹二著〔朝日新聞社；昭和52年〕に詳しく解説が載っている。

パオロとフランチェスカが読んだ物語は，イギリスの伝説的物語，アーサー（Arthur）王と円卓の騎士団の物語で，その円卓の騎士ランスロット（Lancelot）がアーサー王妃ギネヴィア（Guinevere）と道ならぬ恋をし，聖盃探求に失敗する話である。（ここで人名のカタカナ書きは，その時々の引用文によって変わる。例えば Lancelot ランスロット／Launcelot ラーンスロット，Galeotto ガレオット／Galahad ガラハッド／ガラハルト，Guinevere ギネヴィア／Gwenyver グウィネヴィア等々，なお英文は主に *Malory Works* による。）

既にキーツはスペンサー（Edmand Spenser ? 1522-1599）の『妖精の女王』（*The Faerie Queene*）を読んでそこに登場する騎士アーサー（Arthur）を知っている。アーサー王伝説にまつわる話は紀元600年頃からフランスに渡ったブリトンの吟遊詩人達がフランス語でアーサー王物語を語り，それがまたノルマン公のイギリス征服（1066年）により11世紀頃イギリスに戻って，15世紀中頃に作家マロリー（Sir Thomas Malory ?before 1410-d. 1471）によって物語が纏められ，1485年7月31日にキャクストン（William Caxton）の印刷で『アーサーの死』（*Le Morte Darthur*）というタイトルで出版され，これが広く流布されたのである。このキャクストン版によって，スペンサー，スコット（Sir Walter Scott 1771-1832），テニソン（Alfred Tennyson 1809-1892），スウィンバーン（A. C. Swinburn 1837-1909），等が影響を受けている。後に出てくるがスコットの『湖上の美人』*The Lady of the Lake* を，テニソンはアーサー王や，ランスロットとエレーヌ，ギネヴィア等について書いている。そしてダンテ（Dante Alighieri 1265-1321）は既に12世紀頃イタリアに伝わって人口に膾炙（かいしゃ）していたランスロットとギネヴィアの物語をパオロとフランチェスカの恋に陥る場面で使っている。マロリーはフランスのロマンス作者ク

レチアン・ド・トロワ（Chrétien de Troyes）の『ランスロ，または荷馬車の騎士』'*Le Chevalier au Charrette* (*Lancelot*)' を踏襲しているので，二人のファースト・キスの場面はそれぞれ違っているところがある。

ところで，マロリーは円卓の騎士の中でランスロットを最高の英雄としている。恋愛と武勇の冒険，そして最後は悲劇で終わる壮大なロマンス（中世騎士道物語）を繰り広げている。キーツがフランチェスカの話に触発されて夢見たことも無理からぬことである。

(ii)

アーサー王と円卓の騎士団の物語はフランスで盛んに吟遊詩人によって歌われて，それがイギリスに戻ってきた。マロリーは *La Queste del Saint Graal*『聖杯の探求』とか *La Mort le Roi Artu*『アーサー王の死』とかいったものを材料にして *The Whole Book of King Arthur and His Noble Knights of the Round* を書き上げた。キーツもアレン・シャルティエール（Alain Chartier）の詩 *La Bell Dame Sans Merci* (1424)①を，『聖アグネス祭の夕べ』*The Eve of St. Agness* 〔ll. 291-2〕）に使ってプロヴァンス地方の歌としている。そしてこのバラッドにうってつけのフランス語のタイトルとしてつけたのも，フランス帰りのアーサー王物語を暗示しているようである。では何故 La Belle Dame なのであろうか，何故 Sans Merci なのであろうか，話を追って解いていきたい。

円卓の騎士の一人となるランスロットは，「湖の淑女」The Lady of the Lake に幼児の時さらわれてきて，湖の館で育てられる。彼は自分の名前も親についても教えてもらわなかった。後に彼は自分の本当の素姓を，悲しみの城（Castle Sorrowful）にあった珍しい墓碑銘で知る。そこには「ここに湖のランスロット，ベノイックのバン王の息子は眠るべし」('Here will lie Lancelot of the Lake, the son of King Ban of Benoic') と刻まれていた。後に彼はこの城を喜びの城（Joyous Garde）と改めた。ランスロットの父は西フランスの領国ベノウイックのバン王（ダビデ王の子孫である），母は王妃ヘレンであった。フランス版では既に 'Lancelot du Lac'（湖のランスロット）となっていたようだが，湖の館で育てられたので Lancelot du Lake と呼ばれていた。

ここで『つれなき美女』のバラッドの第1連を読んでみると，武具甲冑をつけた騎士が湖のほとりをさ迷っている。まさに育てられた湖のほとりにやってきている湖の騎士ランスロットである。それも一人，顔は青ざめて，悩みをかかえている。

I

O' What can ail thee, knight-at-arms,
Alone and palely loitering?

The sedge has wither'd from the lake,

And no bird sing.

あたりはすっかり晩秋の景色で，湖のすげも枯れ，あれ程歌っていた鳥の声は今や聞こえない。その鳥の声は，始めは葦(あし)の間で歌うヨシキリかと思われた。しかし先に挙げたダンヌンチオの『燕の歌』，上田　敏全訳詞集〔岩波文庫〕の最初に出てくる歌の燕や，黒つぐみやひばりの声であった。また発音的に2行目の *l* の舌のもつれが，足どりも重く，ゆっくりゆっくり歩いている騎士の姿をみごとに描いている。続いて第2連ではやつれ果てて憔悴している姿が描かれている。

II

O, what can ail thee, knight-at-arms,

So haggard and so woe-begone?

The squirrel's granary is full,

And the harvest's done.

やつれた騎士とは反対に，リス達は収穫に精をだし穀物蔵は一杯になっている。また麦畑の収穫も済んで，『秋に寄せる』(*To Autumn*) のように，穀物蔵に収穫物が貯えられているのを思い出させる。騎士のやつれきって悩んでいる姿と，豊かな収穫に満足している情景とを対称的に描き出している。

ここで騎士に対して問いかける言葉である。騎士道の精神はまず勇気，忠誠，寛大，および名誉であるという〔高市順一郎訳，『アーサー王伝説』リチャード・キャヴェンディシュ：晶文社，1986，p. 68〕。そして騎士は多くの徳目を身につけなければならない。その徳目の一つに，謙遜があるが，それに続いて，『何故そんなにお悩みですか』"Sir why is it you suffer so?" という同情心が必要であるという〔Richard Gavendish: *King Arthur & The Grail, The Arthurian Legends and their Meaning*; Weidenfeld and Nicolson, 1978, p. 162〕。ここではそれに則ってその徳目を活かしているのである。またバラッドは対話形式でもある。『妖精の女王』でも「アーサーはたまたま，ある婦人に目をとめた。この人はまさに朝のばらのように美しく，みずみずしかったが，何となく悲しげで沈んで見え，何かの悩みにやさしい胸をしめつけられているようであった。」「ご婦人。どうしてそんなに沈んだ顔をなさって，折角のお美しさを悲しみで損なっておられるのですか。誰かがあなたをこんなに不快なお気持ちにさせているのですか。それとも，お気にかなわぬことがあるのですか。わけは何であってもそんなご様子はお似合いになりませんよ。」②〔和田勇一監修・校訂／熊本大学スペンサー研究会訳：スペンサー『妖精の女王』：第2巻第9篇三十六—三十七〕，と声をかけている。

そして第3連では更に顔の白さを浮き立たせている。

III

I see a lilly on thy brow

With anguish moist and fever dew ;

And on thy cheeks a fading rose

Fast withereth too.

額はユリのように白くて，苦悩で顔は靄のかかったように曇り，熱病にかかったように汗をにじませている。頬からはバラ色が消えている。『妖精の女王』に「ああ，清きばらの，しとやかに恥じらいつつ，初めはいかに美しく，顔のぞかするかを見よ。されば，見つる姿の少なきが故に，美はいや勝るなり。されども，ああ，たちまち，あられもなく裸の胸広げるを見よ。しかも，ああ，たちまち色あせ，しぼみ果つるなり。」〔ibid. 第2巻第12篇七十四〕③を思い起こす。ついでにその後を引用しておくと，「さらば，いまだ盛りのうちに，ばらを摘めよかし。盛りの花を散らす老いは，たちまち来るものなれば。時の過ぎぬ間に，同じ罪を犯して愛し愛さるる間に，愛のばらを摘めよかし。」〔ibid. 七十五〕④と歌われ，シェークスピアのソネットの一節も思い起こす。ところでキーツの弟トム（Tom）が結核にかかって，熱で頬を赤くしていた。それも次第に薄れていって死んだのも，5カ月前の12月1日である。看病によって自分も罹病した兆候が出始めてきている。咳が時々出るようになった。そんな苦悩が読み込めるのである。熱やバラの赤，ユリの白を対称にしているが，この詩では白が特別に際立っている。

次の第4連から騎士の話になるのだが，ここでバラッド Ballad について触れておく。

ワッサーマン（Earl R. Wasserman）が *The Finer Tone, Keat's Major Poems*〔Greenwood Press, 1983〕の *La Belle Dame Sans Merci* の冒頭で，「キーツのバラッドをどのように読もうと，記憶にこびりつく韻律や，はかなさと異様，かよわさと怪奇の微妙な混交，また，その効果を生む無駄のないことばの配列などに，読者は魅了されないわけにはいくまい」，という言葉は正鵠を射ている。そして更に，「人がその神秘を洞達すればあきらかになるかもしれない，何らかの意味を暗示するものがある」と言って，「イメージを象徴化に変化させるには魂の呼びかけが必要である」と書いている〔以上「　」内は西山　清訳：『妙なる調べ』キーツの秀作詩；桐原書店，1987, pp. 78-9〕。まさに読者の魂の呼びかけによって，この詩の魂を見つけることが必要となってきている。そして氏は民間伝承の『トマス・ライマー』*Thomas the Rhymer* とか，『タム・リン』*Tam Lin* といったバラッド〔*The Oxford Book of Ballads*: Ed. James Kinsley; Oxford U.P. 1969 参照〕を挙げて，キーツの詩との類似点を見つけだしている。

そこでバラッドについての特徴を探ってみる。藪下卓郎氏は *Traditional and Literary Ballads*〈バラッド詩集〉〔Ed. 藪下卓郎，山中光義；大阪教育図書株式会社，昭和55年〕の中の Introduction で「バラッドに接して何よりもわれわれが感動するのは，人間の原初的な物語（それは妖精・変身・冒険・恋愛・近親相姦などの話からなる）がきわめて簡素で規則的な様式で語られているということである」〔ibid., p. vii〕。そして「要するにそれらは昔話，夢物語，伝説，つまり妖精や英雄や高貴な人についての話」〔ibid., p. xii〕，であるとし，「そこにはやはり人間の業とか

宿命とかを意識することなしには語りえない世界がある」〔ibid., p. xiii〕，と言っている。キーツがバラッド Ballad と副題をつけたのも，このことを暗示しているのである。バラッドはスコットランド，イングランドの国境地帯や，アイルランドやウェールズの辺境地域等々で謡われている。アーサー王伝説はまさにこれらの地域を舞台としている。アーサー王の居城はキャメロット（Camelot）という壮麗な城であった。しかしそれがどこにあったかは色々な説があって，定まっていない。サマセットのキャドベリーがそうだとすると，「たしかにキャドベリーの丘はすばらしい自然の要塞となっていて，周囲にはいくつかの丘も残っており，アーサー王や騎士たちが馬を走らせ，城門をくぐっていたと想像するにふさわしい場所」だそうである〔井村君江著：『アーサー王物語』；筑摩書房，1991，p. 45〕。

(iii)

さてランスロットが18歳になった時である。湖の淑女（魔法の術をマーリン（Merlin）から策略で学びとっていた）妖精のニミュエ（Nimue）は，気が進まなかったが，ランスロットを人間界に戻さなくてはならないと決意する。普通，騎士の叙任式は21歳に行われ，ナイト（Knight）の称号を得るという。彼女は真の騎士としての武術やたしなみをこれまでに彼に教えこんでいた。ニミュエはアーサー王に叙任式を願い出て，ランスロットに称号を授けてもらうようにした。その式のできごとを後年ランスロットはこう回想して言う。「王さまが私を騎士に御任命下さいました当日，私はそそっかしくも剣をなくしました。ところが王妃さまが剣を見つけて下さいました上，もすその中にかくしておいて，剣が入り用な時に，渡して下さったのでございます。さもなければ，私は騎士の居並ぶ中で，恥をかくところでした。王さま，そのようなことがございましたので，あの日，私は王妃さまに，今後は正，不正を問わず，つねに王妃さまをお護りいたしますとお約束したのでございます」〔厨川文夫・厨川圭子訳：『アーサー王の死』，筑摩書房，1993年 p. 235〕。① この時ランスロットは王に忠誠を誓うと共に，王妃に対しても親しみ以上のものを抱いたのである。王妃はすでにランスロットをひと目見たときから好意を持ってしまいやさしい心使いをした。そしてこれをきっかけに二人は激しい恋におちるのである。騎士の称号を得たランスロットは「ランスロット卿」Sir Launcelot du Lake と称するようになる。そして円卓の騎士となったランスロットは武者修行に出かけ，いろいろな誘惑や戦いに勝ち，武勇をたてた。そしてひとたび王妃様が危険に陥ると，どんなことがあろうと駆けつけて王妃様を助けたのである。

さて『つれなき美女』の第4連からみていくと，湖の騎士が悩みの次第をこう語りだす。

IV

I met a lady in the mead,
  Full beautiful—a faery's child,

Her hair was long, her foot was light,

And her eyes were wild.

「私は野原で淑女に会った。それもまことに美しく，まるで妖精の娘(こ)」だという。『妖精の女王』で絶世の美女パストレラを「確かに乙女は誠に美しい顔立ちで，その肢体は完璧なまでに見事に均整がとれ，それを乙女は慎ましやかな気品と，美しい姿の立派な振舞いとでますます引き立てていたので……。」〔op. cit., 第6巻第九篇九〕② という言葉は full beautifull を言い表しているようである。

ところで，アーサー王の王妃の名にはいろいろな綴字がある。例えば，Guinevere, Gwenhwyfar, Guanhumara 等々。マロリー物語（*Malory Works*）では Gwenyvere とか Guenever となっていて，グウィネヴィアとか，グィネヴィア，と訳されており，最近の英米の研究書では Guinevere となっているので，ここではギネヴィアと呼ぶ。そしてこの言葉のいわれについて，R. キャヴェンディシュはアーサーの妻はグウェンフィヴァル Gwenhwyfar,（ギネヴィア Guinevere のウェイルズ形）で，おそらく「白い幻」white phantom，つまり「白の女神」white goddess の意と言っている〔R. Cavendish : op. cit., p. 19〕。井村君江著『アーサー王物語』では，グウィネヴィアを「白い蛇」，「白い女王」としている〔op. cit., p. 73〕。「白い蛇」とすると以下が容易に理解される。もちろん，キーツの『レイミア』*Lamia* も美しい蛇の精ということで思い起こされる。そしてここで特に白が目立つと言ったのは，「白い蛇」がそうであり，アーサー王といえば白馬の騎士であり，ランスロットも白馬に乗っている。白い馬に乗っている婦人といえば魔法使いの女で，湖の妖精ニミュエや魔女モーガン・ル・フェイ（Morgan le Fay）を思い起こす。さらにキーツは青白い（pale）という言葉を盛んに使う。最後に死者の亡霊達も出てくるのもそうである。

ギネヴィアはローマ＝ブリトン系の娘で，父はカメラードのロデグランス王であった〔井村君江著：『アーサー王物語』；op. cit., p. 54〕。髪は金色で，肌は透き通るほど白く，アーサー王の母イグライネ（Ygraine）と同じく，ブリテン中で最も美しい女性（the most beautiful woman in Britain）〔R. Cavendish : op. cit., p. 32〕と言われた。ランスロットが野原で会ったのは白蛇の妖精，ギネヴィア王妃であった。スペンサーは美女セリーナーを「その象牙色の首，雪花石膏(アラバスター)のような胸，恋人が快い楽しさの中に頭をのせる，白絹の枕のような乳房，柔らかな脇腹，そして白くきれいな腹，それは神聖な犠牲を捧げる祭壇のように盛り上がっている。また見事な腿，それは凱旋門のように輝いて見え……」〔第6巻第八篇四十二〕③といって，これまた白づくめで女性の美しさを描き出している。

第4連の「彼女の髪は長く，足は軽やかで，眼は妖しく輝いていた」というのは蛇を象徴している。何故なら，長い髪はゴルゴンの蛇の髪を思い浮ばせる。足が軽いというのは，蛇は dart（矢）のごとく速いと言われている。また目の妖しさはまさに wild（野性的）であるからであ

る。そしてここでlady（婦人）と言っていることによって，タイトルの La Belle Dame が分かってくる。結婚している婦人（Dame）で美しい人，更に蛇を象徴するといえば，それはアーサー王の妻，ギネヴィア王妃である。そうするとダンテが地獄の第二圏で見た者達は皆人妻で，道ならぬ恋をした女達であったことが想い起こさせられる。フランチェスカやセミラミス，ディドーやクレオパトラ，ヘレネやマロリー物語に出てくるイゾルデは皆人妻である。ところがダンテは地獄にギネヴィアを見なかった。何故だろう。

第5連で騎士は「頭には花冠と腕には花輪，さらには良い香りのする帯も作って上げた」という。

V

I made a garland for her head,
　And bracelets too, and fragrant zone;
She look'd at me as she did love,
　And made sweet moan.

ランスロットは円卓の騎士である。円卓といえばキリストの「最後の晩餐」のテーブルが想像される。ここではマーリンが助言をしてアーサー王の父ウーサー・ペンドラゴンに作らせた円卓（round table）が，ウーサーの死後，ギネヴィアの父の所に渡り，アーサーと結婚した時に，キャメロットの城に持ってこられた。騎士達の席順に上下のいざこざが起きないようにということで円卓を使用したという。さらに色々な意味を持つようになる。そしてキリスト教的な使命を帯びた高い騎士道精神と勲位を示す象徴となる(It is an exalted order of knighthood with a Christian mission.)〔高市順一郎訳：op. cit., p. 88／R cavendish : op. cit., p. 54〕。花冠も腕輪も帯（後のガーター肩章ともいわれる）も丸いものとして円卓を象徴している。この場合は，ギネヴィア王妃に忠誠と愛を捧げることを示している。そして蛇のとぐろも円として浮かび上ってくる。

『レイミア』では「いつになったら，この花輪飾りの墓から起きあがれることやら！／生と愛と喜び，それに，心と唇の／〈紅い争いに似つかわしい艶しい躰で／動き回れるのはいつのことやら！　ああ，情けない！〉」〔Lamia : ll, 38-41〕④，という個所や「頭頂にはアリアドネの髪飾り（ティアラ）のような／星をちりばめた青白い炎の冠を載せていた。」〔ibid. ll, 56-7〕⑤〔以上「　」内は西山　清訳：op. cit., pp. 176-7〕，個所も思い起こされる。

それに応えて，「愛しているように私を見て，甘い呻きの声をたてた」という。「愛しているように」ということは，妖精がよくとるからかいの態度や戯れと解する as if よりも，「本当に愛している」のだが積極的に行動を起こし得ない，躊躇しているように思えた，と解した方がよい。何故なら後で「心から愛している」I love thee true と言っている。恋しくてたまらないが，今は人妻でどこか心がとがめる気持ちがあり，軽はずみなことができない状態にある。ただじっと見つめて，想いのたけを伝えるだけである。甘い呻き sweet moan は恋の苦しい胸の内を

吐露する響きと，なにか動物的な響きがある。

第6連では「軍馬に美女を乗せて歩ませたが，一日中彼女の他には何も目に入らなかった」という程騎士はすっかり心を奪われ，魅せられてしまっている。ランスロットも一途に王妃を想っている。マロリー物語では何年間も恋し続けてやっとファースト・キスにたどりつくので，long にはそんな長さがにじみ出ている。

VI

I set her on my pacing steed,
And nothing else saw all day long;
For sidelong would she bend, and sing
A faery's song.

美女を白馬に乗せて野山を歩ませている様子であろう。おそらく day long と sidelong の long で蛇の長さを表わし，sidelong は騎士に身を横にもたせている様子で，誘惑のしなをつくっている様子でもあり，柔らかな蛇の身のくねりの姿態を潜めさせているのでもあろう。蛇の精レイミアがリシウスの心を捉えた時，「美も生も愛もすべてに満たされた心地で，恋の歌を歌い始めた。それはこの世の竪琴には，奏でつきせぬ甘い歌。星は息を潜めるように，喘ぐ光を止めるのだった」〔西山　清訳：op. cit., p. 190／Lamia: ll. 297-300〕⑥。美女は身も心もすっかりまかせてしまって，うっとりと歌を歌っている様子である。誘惑の歌といえば，あのオデュッセイアが聴くセイレーンの歌を思い起こす。そしてギネヴィアの美しい声の響きが伝わってくる。「ギネヴィアは非常に魅力的で，物腰に気品のあるうら若い女性であった。話し方は美しく，振る舞いは嵩高だった」（'Guinevere was a young lady of great charm and noble bearing. She spoke beautifully and acted generously,……'）〔Ed. James J. Wilhelm: *The Romance of Arthur*; Garland Publishing, Inc., 1994, p. 104〕という。

キーツは『レイミア』の中で蛇の精に美しい歌を歌わせている。それは元はといえば，ヘルメース（Hermes）神からきている。ヘルメースは亀の甲羅に牛の腸の筋を張って竪琴（lyre）を作り，それをかき鳴らしていた。そこへ通りがかった異母兄のアポローンが竪琴を欲しがったので，兄から盗んだ牛と交換してやる。また葦笛（reed）を作って吹いて遊んでいると，またアポローンが笛を欲しがったので，魔法の力を持つ牛追いの杖と交換する。この杖は黄金作りの伝令杖（caduceus）カドゥーケウスと呼ばれ，翼のある棒に二匹の蛇が巻き付いたマーキュリー（Mercury）の杖ともいわれる。ヘルメースは商業，貿易の神であり，豊饒と多産の神であり，雄弁，音楽，数学の神でもある〔呉　茂一著：『ギリシャ神話』上巻，新潮社，昭和33年．pp. 151-4〕。竪琴と葦笛をかつて持っていた音楽の神として，蛇の巻きついた杖 snake rod を持ったヘルメースが『レイミア』に出てくるのである。その杖はまた医術の象徴であるので，かつてはキーツの守り神みたいなものであった。またこの伝令杖は，すべての人を眠らせたり，覚まさせたりする働きをもって

いたので，ヘルメースは人間を黄泉に導く，死出の旅路の先導者でもあった〔呉　茂一著：op. cit., p. 155〕。ここでヘルメースが出て来たので，ついでに触れておく。

ヘルメースのアルゴス殺しの話は有名である。アルゴスの古い社に国王イナコスの娘イーオーが巫として仕えていた。大神ゼウスがここに通って寵愛していたが，妃神ヘーラーに見つかって，イーオーは白く輝く牝牛に変えられてしまった。ヘーラーはさらに不安で，アルゴスという怪物を見張りにつけておく。そこでゼウスはヘルメースに命じてイーオーを助け出してもらう。ヘルメースは持っていた魔法の杖と牧笛で，百眼の怪物アルゴスを眠らせて，鎌で首を切り落として殺した，という物語なのである（呉　茂一氏は杖と牧笛を使ったかどうか疑問を挟んでいる）〔呉　茂一著：op. cit., p. 155〕。ところがこの話は，あのキーツが地獄の夢を見た後ですぐに書いたという14行詩に，出てくるのである。

As Hermes once took to his feathers light
When lulled Argus, baffled, swoon'd and slept
So on a delphic reed my idle spright
So play'd, so charm'd so conquer'd, so bereft
The dragon world of all its hundred eyes
And seeing it asleep so fled away: —
Not to pure Ida with its snow 〈clad〉 cold skies,
Nor unto Tempe where Jove grieved that day,
But to that second circle of sad hell,
Where in the gust, the whirlwind and the flaw
Of Rain and hailstones lovers need not tell
Their sorrow—Pale were the sweet lips I saw
Pale were the lips I kiss'd and fair the fo[r]m
I floated with about that melancholy storm—

〔*The Letters of John Keats*: II., op. cit., p. 91〕

ヘルメースがかつて軽い羽根（伝令杖）を振るって
アルゴスを惑わし，うっとりと眠らせた時のように，
私の怠惰な精が，アポローンの葦笛に
吹かれ，魅せられ，陶酔して，
百眼のアルゴスが，見張りの目を奪われたように，
眠っているのを見て，飛び去った。

雪を戴く，冷たい空のもと，清純なイダ山にではなく，
ゼウスがその日嘆き悲しんだテンピの谷間にでもなく，
悲しい地獄の第２圏へと飛んでいった。
そこは突風と旋風と雨あられの吹きまくっている所，
恋人達が悲しみを語るにあまりな所。
青白き甘き唇を見て，
青白き唇にキスをして，
美しき人と共に，私は憂鬱な嵐の中を漂った。

まさにキーツはヘルメースを黄泉の旅路の先導者にして，地獄への道を歩み，地獄の第２圏を浮遊したのである。ここで「美しき」人については色々と説がある。罪を犯した人妻が漂う地獄の第２圏からすると，イザベラ・ジョーンズ夫人が思いつく。これについては松浦暢氏の『キーツ―その夢と現実』に譲る〔第九章『煌めく星』，pp. 249-88，吾妻書房，昭和54年〕。

(iv)

第７連では，甘い香りのする野草の根や，野の蜂蜜やマンナ（甘露）の露を女が見つけてくれたという。薬草は妖精が人を誘惑する時によく使うものであり，蜂蜜やマンナは命をつなぐ飲物である。『妖精の世界』では「特殊な言葉や石や草の力を知っていたフェたちは，それらによって望むだけの若さと美しさと，大きな富とを身につけていた」〔フロリスト・ドラットル著：井村君江訳，研究社，1987年，p. 40〕という。『妖精の女王』では「この魔女は喜び楽しんでさえいれば満足なので，寄ってくる男たちを快楽に酔いしれさせ，甘言と不思議な効き目のある薬草を用いて，思いのままに悪事を働くのです。」〔第２巻第１編五十二〕①，と薬草を媚薬に使っている。ここではどれも甘いものばかりで，誘惑してとろけさせる恋の媚薬か，若さと美しさと力を保つための飲物である。

Ⅶ

She found me roots of relish sweet,
And honey wild, and manna dew,
And sure in language strange she said—
'I love thee true'.

媚薬と同時にここでは聖杯を思い起こす。円卓の騎士達が聖杯探求（The Quest of the Holy Grail）の旅に出かける前の夕食会で，皆の集まっている広間に白い絹で覆われた聖杯が運ばれてきて，あたりは芳しい香りに満ち，そしてその聖杯からこれまでに味わったこともない料理や

飲物が出されて，それを食するのである〔*Malory Works*: op. cit., pp. 521-22〕。他にも大きな儀式のある時は聖杯が出てきて，おいしいごちそうが供される。『聖アグネス祭の夕べ』では，ポーフィーロも儀式の捧げ物として，マデラインの室に入って，めずらしくておいしい食べ物を用意する〔*The Eve of St. Agnes*: XXX〕。この詩に出てくる野草の根や蜂密やマンナの露はまさにこれからの二人の聖なる儀式へのささやかな捧げものなのである。

「そして不思議な言葉で『心から愛しています』と確かに言った」，という不思議な言葉 language strange とは，どんな言葉なのだろうか。妖精は不思議な言葉で話すかもしれない。聞き間違えて妖精の気分を害してしまったなら，ひどい事になる。特殊な魔術用語を使うかもしれない。しかしここでは不思議な言葉であったが，「心から愛しています」と言ったのは「確か」である。『レイミア』(*Lamia*) の中で言う，「喉は蛇であったが，話すことばは，泡立つ密のように，愛のささやきが沸いて出た」〔*Lamia*: op. cit., ll. 64-5〕のである。

アーサー王の時代の宮廷では流暢にフランス語が話されていた。キーツはわざわざフランス語のタイトルをつけているのだから，そのあたりのフランス語の愛の言葉ぐらいはすぐ分かる。そしてマロリーがアーサー王物語をフランス語から中世の英語に移し変えている。中世の英語はキーツにとっては響きの違う言葉であった。ケルト語などが混じっていたら，さらに「不思議な言葉」に聞えたであろう。

確かにギネヴィアはランスロットを本当に愛していた。前述の聖杯探求のための別れを前にして，アーサー王は「ランスロットよ，そなたにはこれまで多大な愛をそそいできた。そのために哀しい言葉をかけねばならぬ。これほどまでに高貴なキリスト教徒の王たちが，円卓に集まったことはない。それが最大の悲しみなのだ」〔*Malory Works*: op. cit., p. 522〕と別れの言葉をかける。ギネヴィア王妃の悲しみはさらに激しく，後で「ランスロット，ランスロット。わたしを裏切って。このままだと，死んでしまうから。」〔ibid., p. 524〕となじり，まるで第8連の「さめざめと泣き，悲痛な程にため息をついた」(She wept and sigh'd full sore) ように嘆き悲しむ。ランスロットは，あのフランチェスカの語った言葉，「愛されて，また愛せざる者やある」と同じ思いになったであろう。

そして第8連においては，「彼女は騎士を妖精の洞穴(ほらあな)へ連れていって，そこでさめざめと泣き，悲痛な程にため息をついた」という妖しい場面になる。

VIII

She took me to her elfin grot,
  And there she wept and sigh'd full sore,
And there I shut her wild wild eyes
  With kisses four.

ここは『妖精の女王』の第一巻の最初の場面と似ている。妖精の騎士こと赤十字の騎士が連れ

の美しい貴婦人（ユーナ姫）と小人（こびと）と共に迷いの森，『迷妄の洞穴（ほらあな）』に入ってしまい，『迷妄』という怪物と戦い，これを倒す。森の外に出ると老人に会いその庵に泊めてもらう。騎士が寝た時，老人アーキメイゴーという魔法使いは，夢の神モーフュースより心を惑わす『夢』を借りだし，騎士にみだらな愛のたわむれの夢を見させる。また老人は一匹の霊をユーナ姫と似た美しい女性にしたてて，騎士のそばに横たわらせる。騎士は自分が崇める姫が色事に耽ろうとするふしだらな女になっている夢を見てはっとして起きあがる。すると目の前に優しい媚態を示し，愛のまなざしで見つめて，恥ずかしそうに接吻（くちずけ）を求めている本物そっくりの乙女がいるのにびっくりする〔『妖精の女王』: op. cit. 第1篇四十九〕⑤。そこで自分の分別を試すと同時に，隠された女の真実を探り出してみようとした。「女は女性がよくやるように，哀れっぽく，もみ手をし，それから，高貴な生まれであり，うら若い身であることに同情をひこうと，泣き出すのであった」〔ibid. 第1篇五十〕⑥。騎士はすげなくすることもできず，慰めの言葉をかけると，女は気をよくして手管を弄することもしなかった。〔ibid. 第1巻第1篇より〕。このあと騎士は誘惑の罠にかけられていく。ここ第8連ではさめざめと泣き，ため息をついて愛を訴える場面となっている。「そして美女の目に四度のキスをして，妖しい妖しい目を閉じた」。ここでは何故四度なのかと誰でも疑問に思う。キーツもすぐにそれを察知して，説明書きをしている。韻の関係で score (20) では多いのでおかしいし，奇数だと両目には半端になってしまうから四度にしたと言っている。これはもっともらしく思えるが，何か納得しがたい。しかしながらキーツはいろいろな想像力を起こさせる余地を残している。さらに第9連の前半まで美女との関係が続いていく。

IX

And there she lulled me asleep
  And there I dream'd—Ah! woe betide!
The latest dream I ever dream'd
  On the cold hill side.

「そこで美女は私をあやして眠らせ，私はそこで夢を見た。あー，冷たい丘の大地で見た最後の夢が何という災いか」と言って目が覚めるのである。『妖精の女王』の場面の中でも，美女が騎士を眠らせる場面がある。例えばサイモクリーズ（Cymochles）という騎士が陽気で気ままで怠惰な精，フィードリア（Phædria）という乙女に誘われて，木陰の谷間に案内され，草の上に寝かされる。乙女は「恐れもためらいもせずに，その傍ににこやかに坐り，兜を脱いだ男の頭を，しどけない膝にのせてやさしく支えてやると，男は，危害を加えられる恐れも感ぜず，すぐにまどろんだが，乙女はその間，美しい歌声で，次のように甘く魔法をかけた」〔第2巻第6篇十四 p. 226〕⑦，と歌を歌って魔法をかける。あるいは他の個所では美しい魔女が，「魔法と魔術で遠くから連れてきた新しい恋人と，楽しみにふけっていたが，長い淫らな喜びの後，恋人を今，奥まった木陰に眠らせたところであった」〔第2巻第12篇七十二，p. 312〕⑧，という所が出てくる。

恐らくキーツはこういう魔女や妖精の手管を知っていて，妖しい雰囲気を作り出したのであろう。ところがアーサー王物語を読んでみると，もっと深い意味が込められている場面なのである。

(v)

マロリーは5月の愛を讃歌している。5月には花が絢爛と咲き競うように，心の花を咲かせようではないか。先ず神にそして真心を捧げた人に。こうした愛は純潔な愛(vertuouse love)である，とマロリーは言っている。昨今の恋愛は熱しやすく冷めやすいが，アーサー王の時代では何年間も続き，真実の愛(love trouthe)と誠実(faythefulnes)を捧げていたという〔*Malory Works*: op. cit., p. 649〕。

ランスロットとギネヴィア王妃との恋はこれまで純潔な愛であった。王妃を慕えば慕う程，二人の噂をする者が宮廷内に多くなったので，ランスロットはできるだけ王妃と付き合わないようにすると，王妃は彼を自分の部屋に呼び，なじるのであった。「ランスロット卿，あなたは日一日と私への愛がさめてゆくようですね。わたしと会うのがたのしくないようですもの」('Sir Launcelot, I se and fele dayly that youre love begynnyth to slake, for ye have no joy to be in my presence,……')〔厨川文夫・厨川圭子編訳：『アーサー王の死』; op. cit., p. 215／*Malory Works*: op. cit., p. 611〕というと，ランスロットは，宮廷では噂が立っていて，アグラヴェイン(Aggravayne)やモルドレッド(Mordred)といった人達が看視しているので注意した方がよい，と言う。そして王妃の身を気遣っており，「王妃さまと私が軽率な行いをいたしましたら，かならずや，人々から辱(はずか)しめと中傷を受けるでありましょう」(The boldnesse of you and me woll brynge us to shame and sclaundia,……)〔ibid., p. 216／*Malory Works*: op. cit., p. 612〕と言って，いいきかせた。「この間ずっと王妃は立ちつくして，ランスロットに言いたいだけ言わせていた。ランスロットが言い終わると，わっと泣きだした。そして，長い間，泣きつづけていた」(All thys whyle the quene stoode stylle and lete sir Launcelot sey what he wold; and he had all seyde she braste oute of wepynge, and so she sobbed and awepte a grete whyle.)〔ibid., pp. 216-7／*Malory Works*: op. cit., p. 612〕。

ランスロットの理性的な言葉によって，想いを寄せる王妃の気持ちは裏切られたようになってしまい，言葉では言い表せない感情に急に襲われて，泣きだしてしまった。泣いているうちに腹立ちまぎれの気持ちから，王妃は宮廷からの退去を彼に命じてしまった。しかし後で悲しい想いをすることになる。

第8連目に「美女は私を妖精の洞穴(ほらあな)へ連れていった」という言葉がある。妖精達は好んで丘の洞穴に住むという。妖精の洞穴(her elfin grot)と言えば白蛇の精の住む蛇穴を思わせる。白蛇

の精はギネヴィアを象徴するので，洞穴はまた王妃の住む王宮を象徴する。王妃には時々大事件が起きる。ピネル卿がガウェイン卿を毒りんごで殺そうとした事件では，王妃がマドール卿に訴えられて反逆罪で火あぶりの刑に処せられそうになった。その時ランスロットが駆けつけて王妃を救出してあげる。この時は王妃は感謝の気持ちと申し訳ない気持ちと安堵の気持ちとでさめざめと泣く。「(ランスロット卿がこれほどの犠牲を払ってくれたのに，私はあんなひどい仕打ちをした)，と思うと，悲しみのあまり，地面に崩れんばかりにさめざめと泣いた」(, and wepte so tendirly that she sanke allmoste to the grownde for sorow that he had done to her so grete kyndenes where she shewed hym grete unkyndesse.)〔厨川文夫・厨川圭子編訳：op. cit., p. 236／*Malory Works*: op. cit., p. 620〕。こうした王妃のランスロットに対する複雑な気持ちが「さめざめと泣き，悲痛なため息」をもたらしている。

「そこで四度のキスをして，妖しい妖しい目を閉じた」という場面で，キーツは先に述べたように，四度について説明書きをしている。事実「妖しい」を二度繰り返していることは，片目，片目を巧みに表しており，「妖しさ」を押えるように，確実に二度ずつキスをすれば，計四度になる。しかしどうも数だけの意味ではないようだ。

キーツは妹ファニーへの手紙でフェアリー・テイルズに触れているし，マーリンとかモーガン・ル・フェといった魔法使いを詩に登場させている〔伊木和子著：『キーツの世界』；研究社，1993，p. 153〕ので，民話とか童話，冒険談あるいはアーサー王物語などを読んでいたであろう。ギネヴィア王妃とランスロットとの物語には，『マロリー物語』版の話とクレチアン・ド・トロワ（Chrétien de troyes）著の『ランスロット，または荷車の騎士』(*Lancelot, or The Knight of the Cart*) の話と民間に広がっている話とがある。本来吟遊詩人が物語ったものであるから，いろいろと話が脚色されていて違ったところがあってよい。かえってそれが話に発展性をもたらせたのかもしれない。

そこでクレチアン・ド・トロワ著の『ランスロット，または荷車の騎士』〔James J. Wilhelm: *The Romance of Arthur*; An Anthology of Medieval Texts in Translation, Garland Pub., 1994〕を読んでみると，ランスロット（ここでは最初はガウェイン Gawain となっている）が悲しみの城で墓石を開けた時，それを見ていた尼僧が他の人に「その方はどなたか知りませんが，一つ言えることは，4つの風が吹く限りあの方に並ぶ騎士はおりません」(She assured him that she did not know it, but one thing was certain: there was not a living knight his equal as far as the four winds blow. p. 144) と語るところがある。「4つの風」とは東西南北の風か，春夏秋冬の風ということで，一年中，ということから，生きている限りとか，この世で，といった強めの意味であろう。普通，3，7，9といった奇数はマジック・ナンバーで妖精達に好まれる数である。それでは両目には合わない。そこで4と関係する東西南北とか，春夏秋冬とか，四大（地水火風）とかいったものは，それなりでまとまったもの，全て，といった感じを持ち，「四度のキ

ス」ということは，全てを尽くしてとか，心から，といった意味のキスであると思われる。「本当のことを言うと，片目ずつに2回で十分だと思う」(to speak truely I think two a piece quite sufficient)〔*The letteres of John Keats* II: op. cit., p. 97〕と言っているのも想いを込めてキスをすればそれで十分であるということであろう。そしてこれを書いた後すぐに，4人の妖精の歌（*Song of Four Faries*）(ibid., pp. 97-100) を書いている。4人の妖精は，四大，つまり地水火風で，キーツは Fire・Air・Earth・Water の順で並べ，サラマンダー (Salamander)，ゼファー (Zephyr)，ダスキーサ (Dusketha)，ブリーマ (Breama) といった名の妖精達に歌を歌わせているのも，4という数字の発想をほのめかしているように思われるのである。

そして心を込めたキスで「彼女の妖しい，妖しい目を閉じた」のである。引き込まれるような蠱惑的な目を閉じるということは，愛の誘惑に誘い込まれてしまったのである。そして第9連になると，騎士から美女に動作の主体が一瞬移って，今度は美女が子守歌を歌って騎士を眠らせたのである。スペンサーの『妖精の女王』の魔女フィードリアのように，魔法をかけたのである。キーツはここら辺を妖精の世界にもっていこうとしたのだが，スペンサーのようにさらりとはいかなかった。おそらくこの詩の発表を遅らせたのも，ここの解釈の妖しい雰囲気が表面的にとらえられるのではないかという危惧を感じたからではないだろうか。

R. キャヴェンディッシュ氏は『アーサー王伝説』(*King Arthur & The Grail*) の中で，妖術師のマーリン(Merlin)が，ランスロットを育てた湖の淑女のフランス名ヴィヴィエン(Vivien)に言い寄ると，ヴィヴィエンは魔術の秘密を教えてくれるなら恋人になってもいいという。マーリンはこの取引に応じ，魔術を最後まで教えてしまう。「ある日，二人でブロセリアンデの魅惑の森に行き，花のまっ盛りの茨の茂みの下に坐っていた時，ヴィヴィエンは膝の上にマーリンの頭をのせ，子守歌を歌って眠らせ，そして帯を使って九重の魔術の円を描いたので，目覚めたときマーリンは靄でつくられた塔の中に閉じこめられてしまっていた」〔高市順一郎訳：『アーサー王伝説』; op. cit., p. 170〕〈One day when they were in the enchanted forest of Broceliande, sitting beneath a whitethorn bush in full blossom, she lulled him to sleep with his head in her lap. Then she drew a magic circle nine times round him with her girdle and when he woke up he found himself in a tower built of mist.〉〔Richard Cavendish: *King Arthur & The Grail*; op. cit., p. 114〕と書いている。「子守歌を歌って眠らせる」ということは，愛の魔術をかけることで，マーリンがヴィヴィエンの愛の魔術にはまり，捕らわれの身になってしまった。ここで帯が出てくるのは，帯が愛の魔術の象徴であるからである。キーツが『聖アグネス祭の夕べ』でマーリンの名前を出しているのは第19連である。「それは，ごくごく秘密に，マデラインの部屋まで男を導いて，男を小室に潜ませること。そうして一人でいれば，人には見つけられずに，乙女の美を見ることができる。そしておそらく，妖精達がベッドの覆いに群がって，ぼんやりとさせる魔法で乙女の眠い目を閉ざしている間に，類まれなる乙女をばその夜得ることができ

るだろう」①と言っている個所は，騎士が妖精の洞穴(ほらあな)に行って，目にキスをする第8連の詩と似ている。さらに続けて「マーリンが悪魔に高くついた負債を払って以来，恋人達はこんな晩には決して会わなかった」(Never on such a night have lovers met,/Since Merlin paid his Demon all the monstrous debt.)〔*The Eve of St. Agnes*: xix, ll. 170-1〕，と書かれている。ここの悪魔とはヴィヴィエンのことで，マーリンにとって愛の取引は身の破滅となって，高くついたことをいっている。キーツはこのことを下地にして，ランスロットとギネヴィアの愛の場面をほのめかしているのである。

(vi)

ランスロットがギネヴィアにかけられた愛の魔術はとても高くついた。王妃との愛のために「聖杯」の探求は失敗し，アーサー王と円卓の騎士達の崩壊をもたらしてしまったからである。王妃との逢い引きの場面は，『マロリー物語』とクレチアン・ド・トロワの『ランスロット，または荷車の騎士』では描写が多少違っている。クレチアンものの方が，ランスロットの敬虔な気持ちが伝わってきて，感動的である。

ギネヴィアがメレアガント(Meleagant／マロリーでは Mellyagaunce)に誘拐されて，ランスロットが助けに行く時，乗っていた馬が敵の矢に当たり倒れてしまうので，通りすがりの荷車に乗って駆けつける。そしてメレアガントと戦うのだが，和睦がなり，決着は先に伸ばされる。ランスロットが王妃に会った時，王妃は一言も口をきかず，冷たくあしらってしまう。荷車に乗るということは，騎士にとって大変恥辱的なことであったので，王妃は軽蔑したのである。ランスロットは不可解な気持ちで城を出る。そして城下の人に捕らわれて，ランスロットの死んだ噂がたつ。その噂を聞いた時，ギネヴィアは，本当に死のうかと思うほど衝撃を受けるのだった。その時，自分のとった冷淡な態度を悔やみ，ランスロットを腕に抱いていたら，と思って後悔し〔Chrétien de Troyes: *Lancelot, or The Kinght of the Cart*; op. cit., p. 168〕，この時決意したのである。ランスロットが無事に戻って来た時，二人で静かに話す機会を持ちたいとランスロットが言うと，王妃は窓を見て，目で示した。部屋を出た時のランスロットの気持ちは幸せで一杯であった。一日が長く感じ，夜の来るのが待ち遠しかった。皆が寝静まる頃，暗い果樹園を通って鉄の棒のはまった窓辺へいくと，王妃が白い衣装姿で中に立っていた。手を握ったが鉄の棒が邪魔で抱き合えなかった。「王妃がお望みなら，中に入ってもよろしいですか」と聞くと，「もちろん，一緒になれるなら」と王妃が応えたので，鉄の棒を引っ張って曲げた。その時怪我をしてしまう。血が流れ，それがあとで問題の種になるとはつゆ知らず，窓から入って王妃のそばに行った。そしてうやうやしく頭を低くく下げた。王妃は腕を伸ばして，彼を引き寄せ，ひしと胸に抱いた。そしてお互いにやさしく見つめ合った。ランスロットの心には愛がしっかりと根

を張っていて，他の情が入る余地はなかった。ここで作者は，二人の逢い引きはいつまでも秘密にしておいて，最も嬉しいものや，一番の楽しみはほのめかすだけでよい，と言っている。朝の別れは辛く，ランスロットは，まるで祭壇の前にいるように，寝室に向かって深々と頭を下げ，後ろ髪引かれる思いで，苦悩を残して窓から出て行った。「別れの苦しみは深く，立ち上がるのがひどい苦難であった。殉教者の苦悩を味わった。心は何度も何度も背後の王妃に戻るのであった」(So deep was the pain of parting that rising was a true martyrdom, and he suffered a myrtyr's agony: his heart repeatedly turned back to the queen where she remained behind.)〔ibid., p. 173〕。

ところがキャヴェンディシュによると，このクレアチアン式のテーマの取扱い方を，後の作家達は好まなかったようであり，別の物語が人口に膾炙(かいしや)するものとなった，という。「ファーアウェイ島（おそらくシーリー島）の領主ガラハルトがアーサーの宮廷にやってきて，ランスロットを心から敬愛し親友の一人となった。ガラハルトは逢い引きの手はずをととのえ，そうしてギネヴィアとランスロットははじめての口づけを交わした。恋人たちがはじめて床を共にしたのは，アーサーがギネヴィアを裏切り妖妃カミーレの床に行った夜のことである。二人の姦淫はこうした口実があったが，ギネヴィアは悲しくも共に犯したこの罪ゆえに，ランスロットが永遠に聖杯の探求に成功できなくなるだろう定めとなったことを悟らなければならなかった」〔高市順一郎：アーサー王伝説；op. cit., p. 132〕という。この物語をダンテはフランチェスカとパウロに読ませているのである。「こがれてやまぬほほゑみが，思ふひとの口づけを受けたくだりを読んだとき，永久に私と離れないあのひとはうちふるへ，私の口を吸ひました」という例のくだりである。「その物語の書と，物語の作者は，げにガレオット。その日われらは，もうそれ以上読み進みませなんだ」と言って泣き伏したのも，ガレオットことガラハルトの恋のとりもちによるものであった。しかしクレチアンでは王妃の決断が騎士をあやして眠らせ，愛の夢を見させるのである。

第9連の「夢見たうちの最後の夢」は「災いなるかな！」である。夢見たうちの幾つかの夢は，これまで王妃との楽しく過ごした夢であったり，苦労をしてやっと王妃を救ってあげたことなどであろう。そうした数々の王妃と関わる事柄の最後が王妃との愛の夢であった。ところが愛に捕らわれて罪を犯した騎士に，「つれなき美女が，おまえを虜にしたぞ」，と王や王子達，そして兵士達が警告を発する夢でもあった。終わりの2行で「冷たい丘の大地で夢見たうちの最後の夢」といって一区切りつき，次に第10連へと続いているのは，二つの夢の事柄を区切っているからである。さらに夢を見ているならば，妖精の洞穴(ほらあな)，つまり王宮の一室でなければならないのに，急に「冷たい」丘の大地となるのは，「災いなるかな」と意識が目覚めてしまったからである。では何故「冷たい」丘の大地なのだろうか。話はマロリーの『アーサー王の死』の物語の最後の方に飛んでしまう。

アーサー王と息子のモルドレッド (Sir Mordred) (腹違いの姉とは知らずにロット王妃モルゴースに生ませた子である。アーサー王も知らずに罪を犯していた) がお互いに相打ちになるまで戦った場面で，マロリーは「こうして両軍は終日戦い，多くの気高い騎士が冷たい大地に倒れるまで休まなかった。夜の迫りくるまで，戦いつづけ，その頃までには，丘陵に十万の死者が倒れていた」〔厨川文夫・厨川圭子訳：op. cit., pp. 427-8〕(And thus they fought all the longe day, and never stynted tylle the noble knyghtes were layde to the colde erthe. And ever they fought stylle tylle hit was nere [ny]ght, and by than was there an hondred thousand leyde dede uppon the erthe.) 〔*Malory Works*: op. cit., p. 713〕と書いている。

冷たい大地 (the cold erthe)，つまり「冷たい丘の大地」(the cold hill side) こそ彼らの戦場であり，墓場であった。意識に目覚めた騎士にとって，かつて王宮のあった丘の大地は戦場地となり，墓場と化してしまっていたのである。

次の第10連で「青白い顔をした王や王子達，また戦士達がみんな死人のように真っ白な顔をして，『つれなき美女がおまえを虜にしたぞ！』と叫んだ」のである。

X

I saw pale kings and princes too,
  Pale warriors, death-pale were they all;
They cried—'La Belle Dame sans Merci
  Hath thee in thrall!'

王妃との一夜の夢のあと，ランスロットが流した血が次の朝，メレアガントに発見されて，誰か傷を負った兵士と同衾して，王妃は王に対して不貞を働いた，と疑われる。それを晴らすためにランスロットはメレアガントと決闘をし，相手を倒して，ランスロットが殺そうか殺すまいかと迷った時，王妃の顔を見た。その時の王妃のとった決然たる態度が決着をつけ，ランスロットはメレアガントの首を落した。

このように王妃に対しての愛に応えている限り，アーサー王に対しては忠義に反することになる。しかしランスロットは王妃への愛をとる一方，アーサー王に対しても忠実であったのである。何故ならアーサー王は実に心の広い，感心するほどに寛大な，立派な王であったからである。「アーサー王はラーンスロットと自分の王妃のなかに醜聞がたつのをひどくいやがった」〔ibid., p. 346〕② という。というのは「ラーンスロットが今までにどれほど王や王妃のために尽くしてくれたかを思うから」〔ibid., p. 346〕③ であった。

ところが二人の仲を騒ぎ立てる者がいた。「全世界の騎士道の華をすっかり亡ぼしつくし殺してしまうまでおさまらなかった。それもすべてはといえば，不幸の種をまきちらす二人の騎士—アグラヴェインとモルドレッドであった。」とマロリーは書いている〔ibid., p. 342〕④。

XI

I saw their starved lips in the gloam,
With horrid warning gaped wide,
And I awoke and found me here,
On the cold hill's side.

二人は策略で，ランスロットが王妃に呼び出されて王妃の部屋にいる時，他の十二人の円卓の騎士達と一緒に押し掛けて，宮廷中に聞こえよがしに，「裏切り者の，湖のランスロットよ，さあ，現場を取り押さえたぞ」〔ibid., p. 349〕⑤と大声で叫ぶのであった。この時「ああ，これで私たちは二人ともおしまいです」〔ibid., p. 349〕⑥と王妃が言った。ランスロットは十二人とアグラヴェインを殺すが，モルドレッドを殺しそこねてしまう。そして王妃の所に戻り，「王妃さま，われわれのまことの愛も終りを告げました。これからはアーサー王は私の敵となられるでありましょうから」〔ibid., pp. 353-4〕⑦と言って，王妃に口づけし，指輪を交換して別れるのである。

第11連の「暗闇の中で渇つえた口を大きく開けて，恐ろしい警告を発しているのを見た」というのは，二人の恋が何をもたらすかを警告する声であった。二人の恋を暴こうとして殺された者達の叫び声であり，二人の恋のために，アーサー王とランスロットの戦い，フランスでのガヴェインとランスロットの戦い，そしてアーサー王とモルドレッドの戦いで死んでいった円卓の騎士たちの叫び声だったのである。

「そして目が覚めてみたら，冷たい丘の大地にいるのだった」という。ここで注意することは，第9連では 'the cold hill side' となっているのが，第11連では 'the cold hill's side' と「's」がついているところである。先に述べたように，「冷たい丘の大地」は死者達の眠る丘の大地である。従って死者達が眠る「その」丘の大地にいる，という強い意識が出されているものと思われる。(ここでは Garrod 編による。J. Stillinger 編では両方に「's」がある。)

ついに，アーサー王とランスロットの二人は戦うことになるのだが，ランスロットは決して王には手を出さなかった。それにアーサー王は言っている。「ランスロットと私が仲違いをするとはなんという不幸なことだ。ああ，アグラヴェインよ，アグラヴェインよ，お前と弟のモルドレッドがランスロットに悪意を抱いたばっかりに，この悲劇が起ったのだ」〔ibid., p. 369〕⑧と。そしてまた「アーサー王は馬に乗ると，ランスロットをながめた。その時，他の誰よりも自分に忠誠を尽くしてくれたランスロットのことを思い，王の眼に涙があふれた」〔ibid., p. 382〕⑨とも言って，「ああ，なぜこの戦さが始まったのだろう！」〔ibid., p. 382〕⑩と嘆くのである。まだまだ二人の間には，信頼関係があった。

そしてアーサー王とモルドレッドとの戦いで，ランスロットがフランスから駆けつけて来るのを待つために，休戦条約を交わして，酒を酌み交わしている時，ヒースの中から毒蛇が出てきて，騎士の一人にかみついた。剣を抜いて殺した時，剣を抜かれたのを見て，両軍は戦闘体制に

入ってしまった〔ibid., p. 429〕。悲惨な戦いになり，例の十万人の兵士が累累と屍を重ねる丘となるのである。アーサー王とモルドレッドは差し違えて倒れ，モルドレッドは死に，アーサー王は深手を負ってアヴァロンの島へと運ばれて行ったという。ここで毒蛇（adder）が出て来たことによって，アーサー王に「なんという不運な日だ」〔ibid., p. 429〕[11]と嘆かせる以上に，ギネヴィアとの出会いが，いかに不思議な運命のいたずらをもたらしていたかを知るのである。先にギネヴィアを白蛇の精とした。ギネヴィア（Guinever）には幾つかの綴字があるが，そのうちの一つ，Gwenhwyfar を見ると，Gwen は白で，hwyfar は viper（毒蛇）ともとれる。英では adder をさす。蛇の出る話では「バビロン人の英雄ギルガメッシュは，死の国へ最愛の友を救出に出かける。そして不死の木をまさに手に入れようとしたところで，蛇が現われ，奪い返され」てしまったという話がある〔キャヴェンディッシュ：『アーサー王伝説』; op. cit., p. 16〕。何か事を成そうとすると蛇が出てくる。蛇の持つ不思議な力は，蛇の伝令杖を持つヘルメースと共に，人間の運命の節目を司っている感じがする。

ギネヴィアはアーサー王の死を聞いて，アームズベリーの修道院の尼僧になり，悔俊の秘蹟を受け，修院長になった〔厨川文夫・厨川圭子訳：op. cit., p. 439〕。ダンテが地獄の第2圏でギネヴィアを見なかったのはこのためである。ラーンスロットが王妃を捜して，とある尼僧院に来た時，王妃は気づいて，気を失ってしまう。しばらくして気がつき，こう語った。「この人と私が原因で，この戦争が起こり，この世でまたとない気高い騎士がたがなくなったのです。私たちが愛し合ったばっかりに，私の立派な夫は討ち死にしました」。そしてランスロットに向って「ですから，どうか，ラーンスロット卿，愛し合った私たちの愛情にかけても，もう決して私と会わないで下さい。神さまに代って命令します。私との附き合いを断って，自分の王国へ戻りなさい。そして国を戦争や侵略からしっかり護りなさい。私は今まであなたを愛しつづけました。それだけに，あなたと会う気になれないのです。なぜなら，あなたと私の愛がもとで，王の華，騎士の華ともいうべきお方がなくなったのですから」〔ibid., pp. 443-4〕（'Thorow thys same man and me hath all warre be wrought, and the deth of most nobelest knyghtes of the world; for thorow oure love that we have loved togydir ys my moste noble lorde slayne.）（and there[f]ore, sir Launcelot, I requyre the and besechet the hartily, for all the lo[v]e that ever was betwyxt us, that thou never se me no more in the visayge. And I commaunde the, on Goddis behalff, that thou forsake my company. And to thy kyngedom loke thou turne agayne, and kepe well thy realm frome warre and wrake, for as I have loved the heretofore, myne [har]te woll nat serve now to se the; for thorow the and me ys the f[lou]re of kyngis and [knyghtes] destroyed.）〔*Malory Works*: op. cit., p. 720〕とつれなく言うのであった。愛し続けたがために，「それだけに，あなたと会う気になれないのです」という言葉ほど，真実でつれない言葉は無い。そして更に，決定的な言葉は，王妃が死際に，「私は万能の神さまにお願

いします。生きたまま，この目でラーンスロット卿を見ることができませんように」〔厨川文夫・厨川圭子訳：op. cit., p. 449〕(I beseche Almyghty Got that I may never have power to see syr Launcelot wyth my worldly eyen!)〔*Malory Works*: op. cit., p. 722〕と言った言葉ほど，つれない言葉はないであろう。題名の Sans Merci はここからきているように思われる。

ランスロットにとって唯一の慰みは，ギネヴィアを丁重に葬ることができたことであった。王妃の顔を見て「泣き崩れることもなく，ただ，ほっとため息をついた」だけだという。〔ibid., p. 449〕(Than syr Launcelot sawe hir vysage, but he wepte not gretelye, but syghed.〔*Malory Works*: op. cit., p. 723〕。そして隠者に向かって，「私の悲しみは終わることがあり得ないでしょう。王と王妃の美しさ，気高さを思い起こし」，そして「あのお二方のご親切に対して私の不親切を思う時，私の心は重くなり，体を支えることができなくなりました」〔厨川文夫・厨川圭子訳：op. cit., p. 450〕(, but my sorow may never have ende. For whan I remembre of hir beaulté and of hir noblesse, that was bothe wyth hyr kyng and wyth hyr,) (this remembred, of their kyndenes and myn unkyndenes, sanke so to myn herte that I myght not susteyne myself.)〔*Malory Works*: op. cit., p. 723〕と語るのだった。

ランスロットもアーサー王とギネヴィア王妃の墓のところで，飲まず食わずで過ごし，ただ祈り続けたために，ついに亡くなってしまう。亡骸は「喜びのとりで」の，かつて墓蓋を開けて自分の素姓を知った墓に葬られたのである。「悲しみのとりで」であったのは，これを言っていたのである。

詩の最終連はまた元の場面に戻る。「こんな訳で，一人青ざめ，さ迷いながら，ここに留まる次第。もう湖のスゲは枯れ，鳥は歌っていないけれど」，と騎士は答えるのである。

XII

And this is why I sojourn here
  Alone and palely loitering,
Though the sedge has wither'd from the lake,
  And no birds sing.

『つれなき美女』のつれなさを追っているうちに，王妃もランスロットも亡くなってしまった。しかしランスロットにとって，きっと安らかに眠ってはいられなかったのではないか。眠っていても「つれなき美女がおまえを虜にしたぞ！」，と亡霊達に叫ばれれば，すぐに目を覚ましてしまうだろう。叫ばれなくても気になって，さ迷い出てしまう。そして湖のほとりをさ迷っていると，問われるであろう。「あー騎士よ　何をお悩みですか」と。その時騎士はどう答えるであろうか。これまでの数々の悩みを数え上げればきりがない。人には王妃への愛か，王への忠義かで悩んでいるのではないか，と言われるであろう。しかしどちらも命より大事ではあったが，迷うことはなかった。王妃への愛が全てであった。そして隠者に答えたと同じように答えるであ

ろう。「私の悲しみは終ることがあり得ないでしょう。王と王姫の美しさ，気高さを思い起こすと，お二方のご親切に対して私の不親切を思う時，私の心は重くなる」と。騎士には王妃のことが心配でならないのである。王妃に想いがいくと，またかつての夢に戻っていってしまう。

(vii)

こうして前に戻っていくという円環運動はバラッドの特徴である。その円環は円卓の騎士を暗示しているし，とぐろを巻く白蛇をも思わせる。アーサー王の物語や，ランスロットとギネヴィアの物語がこのキーツの詩に読み込まれているならば，ロマンス（中世騎士道物語）のエセンスが凝縮されていると言える。妖しい妖精詩と見られ，不思議な魅力を持つが，不可解な詩と見られていたこの詩が，その底に秘められた愛の物語を読むならば，ブリッグズ氏が言うように「英語で書かれたもっとも美しい妖精詩のひとつではないだろうか」〔『イギリスの妖精・フォークロアと文学』：キャサリン・ブリッグズ著；石井美樹子，山内玲子訳，筑摩書房，1991，p. 253〕。「『つれなきたおやめ』はわれわれの近代精神にとって伝説的中世そのものである夢の本質を立派に要約している」〔ルイ・カザミアン著：『象徴主義と英詩』；岡本昌夫・竹園了元共訳，松柏社，1965，p. 172〕を引用して，「カザミアンの批評はわれわれにアーサー王伝説を連想させずにはおかないであろう」と高橋雄四郎氏は言及されている〔高橋雄四郎著：『キーツ研究，自我の変容と理想主義』；北星堂，昭和52年，p. 84〕。カザミアンが出たので，ルグイにも触れておくと，二人の共著『英文学史』で，ルグイはクレチアン・ド・トロワには目もくらむような詩句があるという。引用の句は‘Fils d'or ne gette tel luur/Cum si chevel cuntre li jur’（No golden thread shines so bright/As her hair against daylight.）で，「彼女の髪ほど陽に映えて，燦然と輝く金髪はない」と言っているのは，あのギネヴィアの美しい，長い髪のことを言っているのである〔*The History of English Literature*: Emile Legouis, Louis Gazamian; J. M. Dent and. Sons, 1971 p. 57〕。そして彼の詩句には，いたるところに「白」が散りばめられているという。例えば，英訳で‘In an orchard, near a springlet/Whose water is clear and gravel white/Is a king's daughter sitting……’「果樹園の，小さな泉のほとり，水は澄み，小石は白く，王女が一人竚みて……。」といったように使われている〔ibid., pp. 57-8〕。キーツの「白」もこんな影響があったのではないか。あるいは巧みに使いこなしているのであろう。

こうして中世の物語に想いを馳せた時，日本の万葉の王宮にも同じような物語を忍ばせる歌があった。

天皇（天智）が蒲生野（がもうの）で狩りをなさった時に作った歌

額田王（ぬかたのおほきみ）

あかねさす　紫野（むらさきの）行き　標野（しめの）行き　野守（のもり）は見ずや　君が袖振る　（巻一の二〇）

皇太子(ひつぎのみこ)が答えた御歌

大海人皇子(おおあまのみこ)（天武）

紫の　にほへる妹(いも)を　憎くあらば　人妻ゆゑに　我(あれ)恋ひめやも　（巻一の二一）

日本の万葉の皇子も，西洋の中世の王子も悩みは同じであった。憎くあらば「人妻ゆゑに　我恋ひめやも」と。

『つれなき美女』

Ⅰ

あー　騎士よ，なに悩む
一人青ざめ　さ迷うて。
湖のスゲは枯れ
鳥はもう鳴かぬのに。

Ⅱ

あー　騎士よ，なに悩む
やつれはて　悲嘆にくれて。
リスの蔵はすでに満ち
取り入れも終わったのに。

Ⅲ

おまえの額に　ユリを見る
苦悩の靄に　熱の露帯びて。
頬には　あせゆくバラを見る
たちまちしおれ　枯れてゆく。

Ⅳ

私は野原で淑女に会った
まこと美しい　妖精の娘(こ)。
髪は長くて　足どり軽く
眼は妖しく光っていた。

Ⅴ

髪には花輪　腕にも花輪
香り漂う帯まで　作ってあげた。
恋するように私を見ては
甘い呻きをもらすのだった。

Ⅵ

美女を白馬に乗せて歩ませながら
日がな一日　美女に見とれていた。
身を横に傾けて　歌っていた
妖精の歌。

Ⅶ

甘い香りの草の根や　野生の密や
マンナの露を見つけてくれた。
確かに不思議な言葉で私に言ったー
『心から愛しています』。

Ⅷ

妖精の洞へと私を導き
泣いては悲痛なため息ついた。
私は4たびのキスをして，
妖しい　妖しい目を閉じた。

Ⅸ

美女は私をあやして眠らせ
私はそこで夢を見た。あー災いなるかな！
冷たい丘の大地の上で
夢見たうちの最後の夢が。

Ⅹ

私が見たのは　青ざめた王や王子達，
色青ざめた騎士達も，死人のように
青白く，みんな私に叫ぶのだったー
『つれなき美女がおまえを虜(とりこ)にしたぞ！』

Ⅺ

私は見た　闇の中　渇(か)つえた口を
大きくあけて恐ろしい警告を発したのを。
その時目覚めて気がついた　ここは
冷たい丘の大地の上。

Ⅻ

一人青ざめ　さ迷うて
こうしてここに留まる次第。
湖のスゲは枯れ
鳥はもう鳴かぬのに。

《注》

(ii)

① Ed. Miriam Allott: *The Poems of John Keats* (Longman, 1977), p. 500.

② xxxvi

.....

The prince by chance did on a Lady light,
That was right fair and fresh as morning rose,
But somewhat sad and solemn eke in sight,
As if some pensive thought constrained he gentle spright.

xxxvii

.....

"Gentle Madame, why beene ye thus dismayd,
And your faire beautie doe with sadnes spill,
Lives any that you hath thus ill apayed?
Or doen you love? or doen you lack your will?
What ever bee the cause, it sure beseemes you ill."

〔Edmund Spenser: *The Faerie Queen*; (Everyman's Library, 1966), Book II, Canto XXXVI-VII, p. 278〕

③ Ah! see the Virgin Rose, how swetly shee
Doth first peepe foorth with bashfull modestee,
That fairer seems the lesse ye see her may.
Lo! see soone after how more bold and free
Her bared bosome she doth broad display;
Lo! see soone after how she fades and falls away.

〔ibid. Book II-XII, LXXIV; vol. 1, p. 331〕

④ .....

Gather therefore the Rose whilest yet is prime,
For soone comes age that will her pride deflowre,
Gather the Rose of love whilest yet is time,
Whilest loving thou mayst loved be with equall crime.

〔ibid. Book II-XII, LXXV; vol. 1, p. 331〕

(iii)

① 'My lorde,' seyde sir Launcelot, 'wytte you well y ought of ryght ever [to be] in youre quarell and in my ladyes the quenys quarell to do batayle, for ye ar the man that gaff me the hygh Order of Knyghthode, and that day my lady, youre quene, ded me worshyp. And ellis had I bene shamed, for that same day that ye made me knyght, thorow my hastynes I loste my swerde, and my lady, youre quene, founde hit, and lapped hit in her trayne, and gave me my swerde whan I had nede thereto; and ells had I bene shamed amonge all knyghted. And therefore, my lorde Arthure, I promysed her at that day ever to be her knyght in ryght othir in wronge.' 〔*Malory Works*: ed. Eugene Vinaver, Oxford University Press, 1971, p. 620〕

② And soothly sure she was full fayre of face,
And perfectly well shapt in every lim,
Which she did more augment with modest grace

And comely carriage of her count'nance trim,

〔*The Faearic Pueene:* op., cit., Book IX-IX, IX; vol. 2, p. 384〕

③ Her yvnrie neck; her alabaster brest;
Her paps, which like white silken pillowes were
For love in soft delight thereon to rest;
Her tender sides; her bellie white and clere,
Which like an Alter did itselfe uprere
To offer sacrifice divine thereon;
Her goodly thighes, whose glorie did appeare
Like a triumphal Arch, and thereupon
The spoiles of princes hang'd which were in battle won.

〔ibid. Book VI-VIII, XLII; vol. 2, p. 379〕

④ "When from this wreathed tomb shall I awake!
When move in a sweet body fit for life,
And love, and pleasure, body the ruddy strife
Of hearts and lips! Ah, miserable me!"

(*Lamia*; Part I, ll. 38-41)

〔*The Poems of John Keats*; Heineman, 1978, p. 453〕

⑤ Upon her crest she wore a wannish fire
Sprinkled with stars, like Ariadne's tiar:

(*Lamia*; Part I, ll. 56-7) 〔ibid. p. 453〕

⑥ ....., she began to sing,
Happy in beauty, life, and love, and every thing,
A song of love, too sweet for earthly lyres,
While, like held breath, the stars drew in their panting fires.

(*Lamia*; Part I, ll. 297-300) 〔ibid. p. 460〕

(iv)

① "Her blis is all in pleasure, and delight,
Where with she makes her lovers dronken mad;
And then with words, and weedes, of wonderouse might,
On them she workes her will to uses bad:
.....

〔*The Faearie Queene*: op. cit.; Book II-I, LII, vol. 1, p. 183〕

② Her throat was serpent, but the words she spoke
Came, as through bubbling honey, for Love's sake,

(*Lamia*; Part II, ll. 64-5) 〔J. Stillinger: op. cit., p. 453〕

③ 'A, Launcelot!' seyde the kynge, 'the grete love that I have had unto you all the dayes of my lyff makith me to sey such dolefull word is! For there was never Crysten kinge that ever had so many worthy men at hys table as I have had thys day at the Table Rounde. And that ys my grete soow.' 〔*Malory Works*: ed. Eugene Vinaver; Oxford U. P., 1977, p. 522〕

④ 'A, sir Launcelot, Launcelot! Ye have betrayde me and putte me to the deth, for to leve thus my lorde!' 〔ibid., p. 524〕

⑤ And as halfe blushing offred him to kis,
With gentle blandisment and lovely looke,

〔*The Faearie Queene*: op. cit.; Book I-I, XLIX, vol. 1, p. 30〕

⑥ Wringing her hands, in wemens pitteous wise,
Tho can she weepe, to stirre up gentle ruth
Both for her noble blood, and for her tender youth.

〔ibid. Book I-I, L, vol. 1, p. 30〕

⑦ And her sweete selfe without dread or disdayn
She sett beside, laying his head disarmed
In her loose lap, it softly to sustayn,
Where soone he slumbred fearing not to be harmed:
The whiles with a love lay she thus sweetly charmed.

〔ibid. Book II-VI, XIV, vol. 1, p. 231〕

⑧ With a new Lover, whom, through sorceree
And witchcraft, she from farre did thither bring:
There she had him now laid aslombering
In secret shade after long wanton joyes;

〔ibid. Book II-XII, LXXII, vol. 1, p. 330〕

(v)

① Which was, to lead him, in close secrecy,
Even to Madeline's chamber, and there hide
Him in a closet, of such privacy
That he might see her beauty unespied,
And win perhaps that night a peerless bride,
While legion'd fairies pac'd the coverlet,
And pale enchantment held her sleepy-eyed.

(*The Eve of St. Agnes*; 19. ll. 163-171)

(vi)

① Although the window was quite high up, Lancelot passed quickly and easily through it. He found Kay still asleep in his bed. He came next to that of the queen; Lancelot bowed low and adored her, for he did not place such faith in any holy relic. The queen stretched out her arms toward him, embraced him, clasped him to her breast, and drew him into the bed beside her, looking at him as tenderly as she could, prompted by Love and her heart. She welcomed him for the sake of Love; but if her love for him was strong, he felt a hundred thousand times more for her. Love in other hearts was as nothing compared with the love he felt in his. Love took root in his heart, and was so entirely there that little was left for other hearts.

Now Lancelot had his every wish: the queen willingly sought his company and affection, as he held her in his arms, and she held him in hers. Her loveplay seemed so gentle and good to him, both her kisses and caresses, that in truth the two of them felt a joy and wonder, the equal of which has never been heard or known. But I shall let it remain a secret forever, since it should not be written of: the most delightful and choicest pleasure is that which is hinted, but never told.

Lancelot had great joy and pleasure all that night, but the day's coming sorrowed him deeply, since he had to leave his love's side. So deep was the pain of parting that rising was a true martyrdom, and suffered a martyr's agony: his heart repeatedly turned back to

the queen where she remained behined. Nor was he able to take it with him, for it so loved the queen that it had no desire to quit her. His body left, but his heart stayed. Lancelot went straight to the window, but he left enough of his body behind to stain and spot the shets with the blood that dripped from his fingers. As Lancelot departed he was distraught, full of sighs and full of tears. It grieved him that no second tryst had been arranged, but such was impossible. Regretfully he went out the window through which he had entered most willingly. His fingers were badly cut. He straightened the bars and replaced them in their fittings so that, from no matter what angle one looked, it did not seeme as if any of the bars had been bent or removed. On parting, Lancelot bowed low before the bedchamber, as if he were before an alter. Then in great anguish he left.

〔*Chrétien de Troyes*: Lancelot, *or* The Knight of the Cart; *The Romance of Arthur*: An Anthology of Medieval Texts in Translation; ed. James J. Wilhelm, Garland Publishing, Inc. 1994〕 p. 173.

② , the kynge was full lothe that such a noyse shulde be uppon sir Launcelot and his quene; 〔*Malory Works*: op. cit., p. 674〕

③ for sir Launcelot had done so much for hym and for the quene so many tymes..... 〔ibid., p. 674〕

④ .....a grete angur and unhapp 〈e〉 that stynted nat tylle the floure of chyvalry of [alle] the worlde was destroyed and slayne.

And all was longe uppon two unhappy knyghtis whych were named sir Aggravayne and sir Mordred,.....〔ibid., p. 673〕

⑤ 'Thou traytoure, sir Launcelot, now ar thou takyn!' 〔ibid., p. 676〕

⑥ 'Alas!' seyde quene Gwenyver, 'now ar we myscheved bothe!' 〔ibid., p. 676〕

⑦ 'Madame, now wyte you well, all oure trew love ys brought to an ende, for now wyll kyng Arthur ever be my foo.....' 〔ibid., p. 678〕

⑧ '.....And alas, that ever sir Launcelot and I shulde be at debate!' seyde the kynge, 'Jesu forgyff hit thy soule, for thyne evyll wyll that thou haddist and sir Mordres, thy brother, unto sir Launcelot hath caused all this sorow.' 〔ibid., p. 685〕

⑨ So whan kynge Arthur was on horsebak be loked on sir Launcelot; than the teerys braste oute of hys yen, thynkyng of the grete curtesy that was in sir Launcelot more than in ony other man. 〔ibid., p. 691〕

⑩ 'Alas, alas, that 「ever」 yet thys warre began!' 〔ibid., p. 691〕

⑪ 'Alas, this unhappy day!' 〔ibid., p. 713〕

○ テキストは H. W. Garrod 編, *Keats Poetical Works*; Oxford University Press, 1972. を使用。なお第XII連で3行目の has は Jack Stillinger 編, *The Poems of John Keats*: Heinemann, 1978. では is になっている。